みんな友達

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みんな友達

【Ｎコード】
Ｎ５０２５Ｖ

【作者名】
リン

【あらすじ】
友達が二十歳の誕生日を祝ってくれるなんて。夜は達也との約束もあるし、素敵な日になりそう。
手作りのケーキに面白い余興。今日のゲームはみんな対私なんだね。ふふ、負けないよ！　みんな、ありがとうね。

（前書き）

夏のホラー２０１１参加作品です。他に二作品ありますので、あらすじや文字数から読みやすいものをお選び下さいませ。ご興味を頂ければ、他の二作にもぜひお越し下さい。

ハッピーエンド、バッドエンドともに用意しておりますが、この作品がどちらなのかはここでは申しません。お愉しみ頂ければ幸いです。

明日は二十歳の誕生日。これで私も大人の仲間入り。同じゼミのみんなで騒ごうって誘ってもらっちゃった。
夜は達也と約束があるけど、ゼミのみんなで集まるのは昼からで、夕方には終わるはずだし、いいよね。一応メールしとこうかな。今日は早めに休んで明日に備えなきゃ。

大学から少し離れたところ。学生用の施設で、宿泊なんかもできるけど、よく打ち上げとかに使われるみたい。通称『バンボ』。打ち上げで集まる箱だから『バン』と『ボックス』でその略らしい。誰が考えたのか知らないけど、由来はともかく、呼びやすい。
私は初めて来たけど、思ったより豪華な感じ。外見は校舎みたいで普通だけど、中は個室や和室もあって、ちょっとした集まりなら十分使える。台所や冷蔵庫もあるし、これで無料なんだから、そりゃ、みんな使うね。建前でもちゃんとした理由と、代表者の予約が必要なくらい。
「マリ！　早いね」
振り向くと、誘ってくれたサヤがいた。相変わらず派手めの化粧と、明るい赤茶のショートヘアが目立ってる。顔が小さいからよく似合うなぁ。私はあまり自信がないから、ショートにはしたくないんだよね。
「サヤ。今日は誘ってくれてありがとね」
「いいのいいの。代表者の名前はマリにしたしね」
一度予約するとしばらく使えないからかな。私はどうせバンボ使わないし、主役にしてもらってるから構わないや。
「ねえ、今日は誰が来てくれるの？」

「たぶん、ランが先に準備してくれてるはずだけど、会ってない？」
「うん、まだ会ってないよ。来たばっかりなんだ」
「そうなんだ。あとはね、ナナとヨーコが来るよ。楽しもうね」
「うん。ありがと」

すごい。ちょっと感動したかも。
案内されて和室に入ると、テーブルにごちそうと手作りっぽいケーキ。
「あ、マリ！　待ってたよ！　入って入って」
もう一つの入口に目を向けると、両手にお皿を持ったランが入ってきたところだった。綺麗なロングストレートの黒髪。これで白いリボンとかしたらメイドさんみたい。背も高くてモデルみたいだし、羨ましいなぁ。
「これ、全部ランが作ってくれたの？」
「仕上げはね。下ごしらえはみんなでやったんだよ。ふふ」
嬉しい。こんなの初めて。何か、ここまで仲が良いとは思ってなかったのに、こんなにしてもらえるなんて、逆に悪いな。今日からもっと仲良くなれるかな。
「私も何か手伝いたいんだけど――」
「マリは今日はお客様でしょ。気にしない気にしない」
「だって、何か悪いよ。ちょっとでいいからさ、お願い」
「うーん、じゃあ、林檎でもむいてもらおうかな。台所わかる？」
「うん、さっき見たから。任せて」
「じゃ、お願いしよっかな。林檎は冷蔵庫、包丁とまな板は出てるからね」

林檎をむいて戻ったら、ナナとヨーコも来てた。二人ともイメチェンしたのかな。別人みたい。
「ナナ、髪染めたんだ？　ヨーコは随分ばっさりいったんだね」
「あ、マリ。そうなんだよ、思い切って金にしちゃった」

「私はあまり派手にしたくなかったから、切っちゃった。似合うかな」
ナナはあまりくっきりした顔立ちじゃないから、微妙かも。でも聞かれてないから黙っとこう。
「ヨーコっておとなしいイメージなんだけど、そういうスポーティなのも意外と似合うね」
「うんうん、スポーツしてるって感じがする」
「あはは、何それ」
こういうの、楽しいな。達也といる時とはまた違う。昨日『楽しんで来いよ』ってメール返してくれたけど、友達も恋人もどっちも大事にしなきゃ。

しばらくみんなで食べながら話をして、時計を見ると、もう一時間が過ぎている。こういう時って早いなぁ。
「さ、それじゃ始めよっか」
突然、サヤが言った。始めるって何を？
「これ、誕生会じゃないの？　まだ始まってなかったの？」
「それは始まってるけど、お祝いはまだ後でね。今日は、みんなでゲームしようと思ってるんだ」
「へえ。どんなことするの？」
サヤはそういうのを考えるのが得意。結構面白いことを考えるから、期待しちゃうな。
「今日は簡単なことだよ。では、よーく聞いて下さい」
いつものおどけた感じ。話し方も上手だから、結構聞き入っちゃうんだよね。何か、そういう仕事に就いたら大活躍しそう。
「私たちの中には、正直者か嘘つきしかいません。正直者は嘘をつきません。みんなの言葉をよーく聞いて、真実に辿り着いて下さい。私たちは、これから一言ずつ残して、一から四の個室へ入ります。その後、真実を追いかけて下さい。ただし、嘘つきの部屋に入ってしまうと大変なことになるので、気をつけて下さいね」

「う、ん。大体わかった。これは、私対みんなのゲームなんだね」
「そういうこと。ま、難しく考えないで、楽しんでよ。真実に辿り着いたらプレゼントあるからね」
「なーるほど。負けないよ。プレゼントは頂くからね」
こういうのって結構真剣になっちゃうんだよね。きっと負けてもプレゼントはくれるんだろうけど、どうせなら、ゲームにも勝ちたいもんね。
「じゃ、個室の番号順ってことで私から。私たちの中には正直者が一人います」
サヤが一番ね。
「次は私だよ。私たちの中には正直者が二人います」
二番はナナ、と。
「私の番ね。私たちの中には正直者が三人います」
ランが三番……これ、どこかで聞いたことあるような気がするなぁ。
「最後は私。私たちの中には正直者が四人います」
最後がヨーコ、と。思ったほど難しいゲームじゃないみたい。余興みたいなものだもんね。
「じゃ、マリ。部屋で待ってるよ。」
サヤの言葉を合図に、みんなそれぞれ別の部屋へ入って行った。
もうちょっと難しくても良かったんだけどな。矛盾がないように考えると、サヤ以外はみんな嘘つきってことになるから、一番の個室へ行けばいいんだよね。ちょっとだけ『大変なこと』がどんなものか見てみたい気もするけど、ここは素直にいこう。
「サヤ、入るよ」
一番の個室に入ると、奥の窓際に座って外を見ていたサヤが振り向いた。
「早かったね。やっぱり私のところに来たんだ」
「サヤ、今回のは簡単過ぎるよ。すぐわかっちゃった」
「ふふ。残念。私は嘘つきでした。大変なことになっちゃうよ」

「え？　そんな、だって他に答えなんて――」
「ヒントは無しだよ。でも、見逃してあげる。ホントはさ、マリが間違えたら何か罰ゲームやってもらうことになってるんだけどね。次は、よく考えてみてね。他のコは見逃してくれないかもよ」
　おかしいなぁ。他につじつまの合う考え方なんてないはずなのに。真面目に考えるんじゃないのかな？
　一番の個室を出ると、廊下にヨーコがいた。口元に指を立てて、手招きしてる。とりあえず静かに来いってことだよね。その通りにヨーコのそばまで行って、一緒に四番の個室へ入った。
「ヨーコ、どうしたの？」
「あまり大きな声を出さないでね。落ち着いて聞いて。実は、このゲームのことなんだけど」
「思ったより難しくて参っちゃった。困ったことに手詰まりなんだよね」
「私は嘘つきだからこの部屋は罰ゲームになるんだけど――」
「ええっ、それはずるいよ！　ヨーコが呼んだんだもん」
「わかってる、今はそれは置いといて、話を聞いて」
「何か深刻な話なの？　みんなには秘密の話？」
「マリ、ランが達也くんのこと好きだって、知ってた？」
　え！？　そんなの全然……
「知らなかった……それ、ホントなの？」
「ホントだよ。で、ランは今日嘘つきやってるんだけど、かなりひどい罰ゲームを準備してるみたいなの」
「ひどいって言ったって、ゲーム、だよね。脅かさないでよ」
「私が何で部屋を出てマリをこっそり呼んだのか、よく考えて部屋を選んだ方がいいよ」
「……ありがと。よく考えるね」
　ランが達也のことを……全然知らなかった。あえてランの部屋に行こうか、迷うなぁ。せっかくヨーコが教えてくれたんだし……。ランとは後で話せばいいか。

「ナナ、入るよ」
声をかけて、二番の入口を開ける。中に入ると、サヤの時と同じように、奥の窓際に座っていたナナが振り返る。
「マリ、いらっしゃい。よくここに辿り着いたね」
「ってことはナナが正直者かぁ。何で？　このゲームの正解がわかんな――」
突然、口を塞がれた。後ろから抱きしめるようにされてるせいで、身動きが取れない。すごい力だし、口に当てられた手の感じからして、男。もう片方の手は、身体を押さえつけながらも、腰や胸をまさぐってくる。このままじゃ……
「ねえ、聞こえる？　あのサイレン。あなたを迎えに来るんだよ」
遠くで、確かにパトカーのような音が聞こえる。私が何をしたって言うの？
「は？　ちょっと待てよ！　俺は女に悪戯できるって聞いたから……くそっ！」
「痛っ！」
前に突き飛ばされて、転んじゃった。でも、男の顔は見た。あれは、同じゼミの弘樹。
「マリ、大丈夫？」
「ナナ、まさかこれも罰ゲーム？　ちょっとやり過ぎじゃない？」
「ごめん、せっかくだから盛り上げようと思ったんだけど、失敗しちゃったか」
何も取られてはいないし、服なんかも無事だからまだ良かったけど……
「ねえ、ナナが嘘つきってことは、あとはもうランの部屋しか残ってないんだけど」
「それじゃ、ランの部屋へレッツゴー。真実に辿り着いて来てよ」
こんなゲームは放り出して帰ってもいいかとも思ったけど、さすがにここまでされて途中で投げ出すのも気に入らない。何でランが正解になるのかはわからないけど、声もかけずに三番の部屋へと入

る。
「……あれ？　ラン？」
誰もいない。
「ハッピーバースデー！　おめでとう、マリ！」
突然の騒ぎ声に驚いて振り返る。部屋の外には、ランも含めて、みんながいた。
「え？　何？　どういうこと、サヤ？」
「ふふ。マリは見事、真実の前に辿り着きました。この部屋には私たちからのプレゼントがあります」
「え？　だって正解もわかんないし、部屋には何もないよ？」
「ベッドに隠してあるんだよ。とっておきのプレゼントが。ふふ」
ランに言われてベッドを見ると、確かに少しふくらんでるような気もする。
「えっと……ありがと、みんな。何か、私、誤解しちゃってたかも」
「ね、マリ、見て来てよ」
ヨーコに促されて、部屋の中のベッドに近付く。近くで見ると、結構なふくらみ。大きなぬいぐるみとかかな？
「じゃ、ありがたく貰うね。何だろ」
みんなに一声かけて、一気に掛け布団をめくる。
「っ！？」
言葉にならない声が飛び出る。悲鳴には、ならなかった。
そこにあったのは、達也。服は赤黒く染まっている。
「どう、マリ？　愛しの達也くんだよ。嬉しい？」
サヤは微笑んでる。私と達也が見えているのに。
「……どういうこと？　誰がやったの？　何で？」
「みんなでやったの。あなたたちが赦せなくて」
ランの気持ちはさっき聞いたけど、だからってこんな？
「ひどいよ。友達だと思ってたのに。とにかく、警察を呼ぶから」
「その必要はないよ。ねえ、聞こえる？　あのサイレン。あなたを迎えに来るんだよ」

ナナの言う通り、さっき聞こえたパトカーの音は近付いて来てる。
「何で私を……加害者はそっちでしょ」
「達也くんを刺した包丁で、林檎をむいたでしょ」
ヨーコまで。私の友達なんて、ここにはいなかった。
「みんな、グルだったんだね」
「最初に言ったでしょ。私たちの中には正直者か嘘つきしかいませんって。嘘つきしかいなかったの。そして、嘘つきの部屋に入り続けて、大変なことになったでしょ。真実も知ることができた。楽しかったでしょ、最後のゲーム。そのゲームも私たちの勝ちだったけど」
確かに、ルール通りにゲームをして、私が負けた。でも、もうそんなことはどうでもいい。
「サヤ、楽しそうだね」
「楽しいよ。だって、全部こっちの予定通りにいくんだもん。せっかくだから、用意しておいたもう一つのプレゼントもあげる。私たちの名前から、マリが部屋を訪れた順に頭文字だけを受け取ってね」
「サヤ、ヨーコ、ナナ、ラン……。そういうことか。きっと、随分前から計画してたんだね」
「凶器の指紋は偶然だけどね。施設の予約者もマリにしたし、証人が四人もいる。全部、マリがやったことになるの」
「私がここに来なかった場合は考えなかったの？」
「これ、なーんだ」
サヤの手にあるのは、携帯電話。あれは、達也のだ。
パトカーのサイレンが止んだ。たぶん、バンボの駐車場で止まったんだ。

あーあ。これからのことを考えると、憂鬱だなぁ。また、恋人も友達も作り直しじゃん。せっかく大事にしようと思ってたのに、あ

んなことするんだもん。一から作るのは面倒だって、わかってないんだよね、きっと。

あの四人は警察に連れて行かれちゃったし、動画や画像も処分しておかなきゃまずいよね。何があるかわかんないし。せっかく達也がうまいこと撮って、結構売れてたのに。特にランなんかは声も表情も良くて、かなり稼げてたのに、もったいない。

でも、あのゲームは結構面白かったかな。何か企んでるとは思ってたけど、あんな下らないことを一生懸命みんなで計画練ってたなんて。もっとうまくやれば、私を陥れることくらいできたかも知れないのに。ナナの部屋で弘樹がいた時は危なかった。胸元にはレコーダー隠してたから、録音が止まったり、落としたりしたら、状況が変わってたもんね。あ、新しい恋人は弘樹でいいかな。女の身体も好きそうだし、頭も悪そう。

せっかくの誕生日だったのに、寂しいなぁ。余計なことをしてくれたお陰で、達也からの祝いも無くなっちゃったし。そうだ、つまらないプレゼントは返しておかなくちゃね。

「十九歳までの友達。今までありがと。サヨナラ。ふふ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5025v/

みんな友達

2011年8月8日17時08分発行